

第22回「農家巡りウォーキング～有馬・野川方面～」

6月28日開催！

川崎市には1049戸の農家があり、宮前区は267戸、麻生区の276戸に次いでいます。
(別表「川崎市の区別農家戸数」参照)

宮前区の農家は、住宅地の中に残る農地を耕しています。この農家を訪ね、心意気に直接ふれる「農家巡りウォーキング」。2011年10月にスタート以来今年で22回目となります。1年に2回(例年6月、11月)、市政だより宮前区版及び区ホームページで告知、募集をしています。(※今回は市政だより5月号で詳細を告知)

農あるまちづくり部会が毎回巡るコース、農家を決め、当日はガイド役を務めています。コロナ禍の中でも募集人数を減らし継続しています。

最初に農家から「うちは何代目の農家で…」のお話に、宅地化が進む中で農地を守る、先祖代々の農地を愛し続ける気持ちを実感します。増加している施設栽培(温室)の中を見せていただいた際には、水が自動制御で流れてくる様子にみんな

でびっくりすることも。最近は家庭菜園を楽しむ参加者も多く、専門的な質問に農家は丁寧に答えてくれます。農家から「ウォーキングに参加した人が、直売所に来てくれるよ」という声も聞かれ、農家と地域住民のつながりが確実に生まれています。



別表「川崎市の区別農家戸数」

川崎区	1	出所： 2020年 農林業センサス 結果概要(確定 値)
幸区	6	
中原区	77	
高津区	181	
宮前区	267	
多摩区	241	
麻生区	276	

第17回 フォトコンテスト作品募集について

今年も「写真とメッセージで宮前区のいいところ撮り！」をテーマに、宮前区内の美しい場所や景観、まちづくり活動を撮影した写真を募集します。宮前区は今年で区制40周年。これを記念し、入賞者には賞状のほか副賞を贈呈します。また応募全作品を市民館ギャラリーに展示します。

「わたしの好きな宮前区」をコンセプトに写真を応募してみませんか。

募集期間：令和4年6月1日(水)から7月29日(金)まで

応募作品数：1人(1団体)につき2点まで
撮影対象：宮前区内の「知ってほしい風景」「まち

づくり活動」「地域課題に関する風景」
応募方法：詳細についてはまちづくり協議会HPまたはチラシをご覧ください。
主催：宮前区まちづくり協議会、宮前区
問合せ：区役所地域振興課
電話：856-3125



まちづくり広場へのご意見・ご感想はこちらまで

(事務局)宮前区役所地域振興課
電話 856-3125
FAX 856-3280
E-MAIL 69tisin@city.kawasaki.jp
HP アドレス <https://www.miyamae-machikyoo.com>

【編集後記】

ロシアが隣国ウクライナを侵攻するという、とんでもないことが起きた。どうも国の総意ではなく、他人が口を出せない独裁者の妄想から起きたものようだ。一方、日本は各種のけん制機構がからまって、三すくみとなって物事がスムーズに進まないきらいもあるが、少なくとも今回のロシアのようなこととはしない。ただ、周囲にはややこしい国もあるようなので、つけいるすきを与えないよう、議論をつくり、必要な備えをしておかなければ。(S. A.)

特集 このまちで 育む農ある暮らし

まちづくり協議会—農あるまちづくり部会



「宮前区まちづくり協議会 農あるまちづくり部会」主催で、「2022農フォーラム」が3月に開催されました。

1940年代中頃の面積3分の1をしめていた軍用地が終戦とともに解放され、耕作地や公園、学校、公共施設等になり、その後、多くの緑地が田園都市線の開通で住居地としてめまぐるしく変化していきました。

「まちづくり協議会」は、区内の農に関する魅力や課題を追求する農あるまちづくり部会を設立、農産物直売所の紹介マップの作成や農家巡りウォーキング、農フォーラムなどを開催してきました。

農フォーラム4回目となる今回は、援農をまちづくりの視点でとらえ「このまちで育む農ある暮らし」をテーマにしました。援農とは農家と消費者が互いに結びつき、農地、農業を維持し守る活

動です。基調講演と宮前区の農の緑空間を維持して守る農家、団体の発表が行われました(2~3面参照)。

基調講演「援農とまちづくり」では、社会的、福祉的、教育的役割を持つ農地を守るため、市民参加の農を市民協働へ展開していこうと、次世代への農あるまちづくりの継承を促しました。

農業従事者の高齢化で農地の減少が心配される中、歩いてみると新発見があります。次世代による農の後継者も生まれています。また行政、企業、JAによる市民農業体験グループの設立で、近年、遊休地、雑種地化していた所が耕作地に代わりつつあります。



緑のある空間は、いろいろなコミュニティが生まれ、多世代交流の場として活用されています。

これからも「人が好き、緑が好き」を唱えて、農のあるまちの魅力が皆で守っていきましょう。

今月号の主な内容 特集 このまちで 育む農ある暮らし

- 1面 ・まちづくり協議会—農あるまちづくり部会
- 2面 ・基調講演 市民参加から市民協働の援農へ ・都市農業におけるソーシャルネットワーク
- 3面 ・生ゴミから堆肥作りで、野菜作りを楽しむ ・私が描く都市農業の未来
- 4面 ・農家巡りウォーキング～有馬・野川方面～ / ・フォトコンテスト作品募集

次号予告

17回目となる宮前区の魅力発信として始まったフォトコンテストを特集します。

基調講演

「援農とまちづくり」



言をしました。

いわゆる持続可能な開発目標（SDGs）のひとつ、「住み続けられるまちづくり」の達成に都市農業が見直されています。高度成長期以降に進んだ都市農業は、農地と市街地がモザイク的に混在する独特な空間となり、市民の農業参加の場や学習・交流の場の提供、地産地消、防災などの機能を提供しています。

一方、都市農業を営む人が少なくなり人手が足りなくなってきています。小規模な農家が多く、農家の数も減ってきています。宮前区も例外では

市民参加から市民協働の援農へ

～千葉商科大学 人間社会学部 小口広太教員～

自身も長野県塩尻市の農家の出身、現在も畑をかりて野菜作りしている小口氏が、援農について次のような提

言をされました。いわゆる持続可能な開発目標（SDGs）のひとつ、「住み続けられるまちづくり」の達成に都市農業が見直されています。高度成長期以降に進んだ都市農業は、農地と市街地がモザイク的に混在する独特な空間となり、市民の農業参加の場や学習・交流の場の提供、地産地消、防災などの機能を提供しています。

自身も長野県塩尻市の農家の出身、現在も畑をかりて野菜作りしている小口氏が、援農について次のような提言をされました。

いわゆる持続可能な開発目標（SDGs）のひとつ、「住み続けられるまちづくり」の達成に都市農業が見直されています。高度成長期以降に進んだ都市農業は、農地と市街地がモザイク的に混在する独特な空間となり、市民の農業参加の場や学習・交流の場の提供、地産地消、防災などの機能を提供しています。

一方、都市農業を営む人が少なくなり人手が足りなくなってきています。小規模な農家が多く、農家の数も減ってきています。宮前区も例外では

ありません。そんななか農地を維持するためには「多様な担い手」の育成が重要となります。コロナ禍でテレワークが広がり自宅で過ごす時間が増え、畑を耕したい、農家を援けたい（援農）と思う市民が増えています。しかし単に人手を助けるという援農ではなく、もっと耕す市民として都市農業に関わっていくことが求められています。家庭菜園や市民農園などとどまらず、農業体験農園・共同農場など「都市農業の役割への良き理解者であり、農家とともに都市農地の保全に積極的に関わる新たな担い手」となる援農が求められています。人と人のつながりを構築し、都市農業を担うパートナー・農業経営を担うパートナーとして、市民参加から市民協働としての援農へと広げていくことが大切です。

社会的・福祉的・教育的な役割が農地にあります。農のなかにまちがあり、まちのなかに農があるまちづくりを展開していきませんか。

都市農業におけるソーシャルネットワーク

～小泉富生（小泉農園園主）さん～

宮前区平に約1ha、横浜市青葉区元石川に約2000㎡の農地があります。どちらも住宅や小学校に囲まれた環境の中で農業を営んでいます。

宮前区平では、露地野菜を3月から12月に、長男がハウスでいちごを11月から5月に栽培しています。JAセレス川崎のファーマーズマーケット「セレスモス」、生活クラブ生協（神奈川）などに出荷し、地元の皆さんに食べてもらうことを第一に考えています。いちごは「わがままいちご」としてブランド化し、ジャムやゼラートも開発、他にも家族の得意分野を活かし焼き菓子やハーブソルトなど農産加工にも積極的に取り組んでいます。

この地で代々約200年農業を続けています。この先、持続・継承可能な農業を考える中で、人手不足の解消と地域社会からの理解は大きな課題のひとつです。この課題を3つの「えんのう」



「縁・援・演」の視点から考えます。昔は近所の「縁」で農作業のお手伝いが成り立っていました。その後、この「縁」が希薄になり、農業の基礎を学んだ人たちによる作業時間と人を管理し有償の「援」農が生まれました。そして今は「演」。PCやスマホでなく「畑で繋がるソーシャルネットワークの時代」です。コロナ前は、畑に地域の人を招き、収穫体験や飲食を提供、コンサートなどもして1日農園で楽しめる「農園フェス」を開催しました。地域の小学生とは授業として畑で野菜の栽培体験をし、貸農園や収穫体験を運営しています。地域の皆さんと多様なスタイルで関わりながらこれからも宮前区で農業を続けていきたいと思っています。

生ゴミから堆肥作りで、野菜作りを楽しむ

～松下長子（野菜だいすきファーム）さん～



野菜作りに興味がある女性数人が管生の農家・吉岡照允さんに出会い、ジャガイモ栽培を始めたのが一歩。その後吉岡さんから500㎡の畑を借り「野菜だいすきファーム」を立ち上げ約10年。年間30から50種類ほどの野菜を育てています。今年は杉田広行さんからも畑を借りて、新しい局面にTRYします。川崎市環境局のリサイクルリーダーや生協の講師団体として、野菜だいすきファームは生ごみ堆肥を市民に広め、生ごみ堆肥回収を行い、野菜栽培しています。会員は13名。月一度のミーティングで話し合い、情報共有します。毎週末の定例農作業の他、農繁期など必要な時は平日作業も行なっています。

松下さんは福岡のNPO循環生活研究所（循生研）のコンポストリーダーの資格を取得し、ダンボールコンポストを広める活動をしています。循生研設立の(株)LFCが若い人向けに開発したLFCコンポスト（バック型生ごみ堆肥コンポスト）が

人気です。野菜だいすきファームも(株)LFCの企画した「堆肥を送って野菜をもらおうキャンペーン」に参加。50名の堆肥を受け入れ、できた野菜を送っています。

生ごみ堆肥はじわじわ効いて追肥がいらず、「じっくり育てた野菜はおいしい」と松下さんは語ります。

公開企画も行い、畑で出来た大豆を使って味噌造りもしています。大豆を干し、脱穀・分別などで手間がかかりますが、「大勢で作る味噌は本当においしい。市民が農に親しむ機会を増やし、地域循環を楽しむ地域に」と松下さん。5月中旬以降毎週月曜日、午前10時から宮前平の「神奈川ネットワーク」事務所前で野菜販売をしています。

私が描く都市農業の未来

～杉田広行（杉田農園園主）さん～



宮前区管生を中心に約13,000㎡の農地を持ち年間約100品目以上の野菜・果物を栽培しています。ここ数年は果樹のウエイトを高めていて、販売額で見ると、野菜と果樹が同額になってきています。

この時代に都市農業を続ける上で大切にしていることが3つあります。ひとつは、油を燃やす農業はしないこと。温室は太陽光を受け加温し、雨、風よけをするために使っています。旬を大切に、温室内で油を燃やし温度管理をし出荷時期をずらすような栽培はしていません。2つめは、減農薬栽培。使う農薬、量、いつ使うかは「作った作物を自分が食べて安心安全か」を私のものさしで決めています。葉っぱがやわらかい春キャベツは、ものさしを超える農薬が必要なので栽培しません。3つめは、とれたてを販売すること。自宅近くで直売所を週に2日（水・土9時30分

から12時）開き、食べ方を話しながらとれたてを販売しています。近くのスーパーマーケットにも出荷しています。

年間100品目以上を栽培する農業は、特に野菜の出荷前の袋詰めなどの作業は手間も時間もかかります。そういう農業から早く脱却し、自分が作った農産物を食べる人と顔が見える関係を築きたいとずっと考えてきました。地域の幼稚園や小学校での野菜栽培体験の授業や、地域住民にタネまき、草取り、堆肥まきなどをお願いし、顔が見える関係を築いてきました。

その思いを叶える大きな一歩として今年の6月に観光農園を含め、農家レストランを開業する予定です。菅生の里山が残る景色もごちそうになるレストランです。